

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520646

研究課題名（和文）草創期蘭学の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research of the early *Rangaku* or Dutch Studies in Edo period.
 研究代表者 鳥井 裕美子（TORII YUMIKO）
大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：50180203

研究成果の概要（和文）：本研究では、草創期蘭学の実態と歴史的意義を解明するために、医者・蘭学者の前野良沢（1723-1803）を取り上げた。彼の著訳書と蘭書などの関連資料を収集・分析した結果、前野良沢が西洋医学のみならずオランダ語・ロシア史研究の先駆者でもあったこと、彼の本領は医者というよりも言語学者に近かったことが明らかになった。また、不明とされていた前野良沢の翻訳と幕府の対外政策との関係にも新しい情報が得られたので、既存の前野良沢伝の加筆修正を試みる事が出来た。

研究成果の概要（英文）：This research dealt with Maeno Ryotaku(1723 -1803), a physician and Dutch scholar, in order to explicate the actual circumstances and historical significance of the early Dutch Studies in Edo period. In the result, after collecting and analyzing Maeno's works and related materials including Dutch books , it became clear that he was the pioneer not only in Western medicine but also in the studies of Dutch language and Russian history, and that he was more of a kind of linguist than a physician. Moreover I obtained new information concerning the relation between Maeno's translation works and the shogunate's foreign policy. So I could try to revise the existing biography of Maeno Ryotaku.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：歴史学、史学一般

キーワード：日本史・国際交流史・外国語

1. 研究開始当初の背景

(1) 蘭学(洋学)史の原点となっているのは、江戸時代は写本のみで流通し、明治2年に福沢諭吉が初めて出版した杉田玄白の『蘭学事始』である。近代化=西欧化を肯定する世相の中で、蘭学者は先駆者として顕彰され、青木昆陽から前野良沢・杉田玄白、そして大槻玄沢、宇田川玄随、坪井信道、緒方洪庵、福沢諭吉に至る蘭学の系統図は、その後繰り返し引用され、現在も蘭学の本流とされている。

(2) 地方レベルも含めた蘭学(洋学)資料の発掘・研究は確実に進み、蓄積されてきているが、既存の蘭学(洋学)史への根本的な問題提起は不十分である。

(3) 前野良沢は、『解体新書』のみで語られており、しかもそれが杉田玄白の回顧録を根拠にしているため、人物像が一面的なうえ、近年は『解体新書』の訳述リーダーであったことが忘れ去られている。

2. 研究の目的

明治期以降に、時代の要請と特定の集団により作り上げられた蘭学(洋学)史の中で、『解体新書』の訳者としてのみ、それも杉田玄白の陰に隠れて取り上げられる前野良沢に注目し、その多面的な業績と生涯を考究することで、草創期蘭学の実態と歴史的意義を国際的視野で解明するのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 明治期以降の蘭学(洋学)研究史を整理・総括する。福沢諭吉の諸著作を中心に関係文献を再読、「蘭学の系統」を再検討するとともに、明治20年代の蘭学者顕彰活動の内容と時代背景を吟味する。

(2) 前野良沢のオランダ語学を、先達である長崎のオランダ通詞のオランダ語学と比較して、良沢の独自性を明らかにする。その際、彼のオランダ語関係資料「蘭語随筆」「字学小成」「和蘭訳文略」「和蘭訳箋」等を分析し、前野良沢の翻訳法・言語観も検討する。

(3) 『解体新書』と原書「ターヘル・アナトミア (*Ontleedkundige Tafelen, Benevens de daar toe behoorende Afbeeldingen en Aanmerkingen, door Johan Adam Kulmus.* Amsterdam, 1734.)」を対校して、先行研究では十分解明されなかった箇所を検証する。

(4) オランダのハーグ王立図書館・ライデン大学図書館等で、草創期蘭学の原書(蘭書)や関連資料・文献の調査を行う。

(5) 前野良沢のロシア研究の背景と実態を解明する。その際、まず彼が訳述した「魯西亜本紀」「東砂葛記」等を原書と比較し、内容を分析して、その歴史的意義を考察する。さらに、幕府の対外政策、特に松平定信との関係を考究する。

4. 研究成果

(1) 福沢諭吉にとって、『解体新書』翻訳を成し遂げた前野良沢・杉田玄白は、「大日本文明開化の元始」、顕彰すべき先駆者であった。同じ中津藩の先達として、諭吉は前野蘭化(良沢)の顕彰活動に特に熱心で、『解体新書』翻訳の舞台になった築地に「蘭化堂」を設立し、前野良沢・杉田玄白に始まる歴代の蘭学者の肖像と著作を展示する計画を立てたが、実現はしなかった。

明治26年(1893)、前野良沢に正四位が追贈されるが、その贈位運動を推進した中心には、大槻玄沢の孫大槻如電・文彦兄弟がいた。彼らにとって、祖父玄沢の師にあたる前野良沢の顕彰は、自分の先祖の顕彰と等しかったと考えられる。

(2) 長崎のオランダ通詞は、長年日本語の辞書も文法書もない中で、オランダ語習得に努め、家学としてオランダ語に接していた。それに対し前野良沢は、当初医者という立場でオランダ語に接し、言語としてのオランダ語を極めようとしたのである。良沢が興味を持ったのは文字と音韻で、世界のあらゆる言語の文字と音韻にも興味を示したが、やはり一番の対象はオランダ語であった。良沢はオランダ語を研究対象とした最初の日本人といえるかもしれない。

良沢の翻訳法(蘭化亭訳文式)は、日本人

になじみが深い漢文訓読式でオランダ通詞も用いていた方法を、整理・体系化したものである。様々な記号を駆使して工夫を凝らした方法といえる。

通詞の発音やカタカナ表記を批判した良沢は、自身より正確なカナ表記を模索、試行錯誤を繰り返した。彼が考案したカナ表記は、そのすべてが継承されたわけではないが、全く異なる言語体系に属するオランダ語を日本語で表記する難しさを、良沢が認識していたことを示すものである。

前野良沢のオランダ語には、通詞同様、文法理解の弱さと言う弱点があるが、研究の成果が門人大槻玄沢の『蘭学階梯』を介して全国に普及したことは、蘭学の裾野を広げる上で意義があった。

(3)『解体新書』の先行研究は膨大である。今回は、原書と翻訳を対校して、まず先行研究の成果を確認し、その後『解体新書』がどう使われたかという観点から、京都の小石塾で教科書とされ、流布した書き込みの多い写本を検討した。解剖家小石元俊(1743-1809)が開き、息子の元瑞(1784-1849、漢蘭折衷医)が発展させた塾・窮理堂で使われた写本の書き込みは、『解体新書』が原書の本文のみの訳であるのに対し、クルムスの原書の註まで読み込んだことを窺わせるものであった。

(4) 2011年8月21日～31日のオランダ出張では、ハーグ王立図書館・ライデン大学図書館で草創期蘭学の原書を何冊か(長崎の通詞が使ったオランダ語入門書・蘭学者のバイブルであった世界地理書「ゼオガラヒー」等々)調査したほか、ユトレヒトの大学博物館・植物園、ロッテルダムの教育博物館、アムステルダムの市立博物館・東インド会社関連施設を探訪して有意義な知見を得た。

(5) 前野良沢のロシア研究を代表する「魯西亜本紀」は、本邦初のロシア史と言われ、多くの写本が幕末まで幕府や識者に利用された。「東砂葛記」の原書が「ゼオガラヒー」であることは判明していたが、「魯西亜本紀」の原書については、これまで「ベシケレイヒング」という通称は知られていたものの、内容の検討は殆どされることがなかった。今回、残念ながら時間的制約で十分な研究には至らず、準備作業中と言わざるを得ないが、少なくとも原書の出版社と著者に関する情報はオランダ・ユトレヒトで収集することが出

来た。詳細な研究が皆無といってもよい「魯西亜本紀」と原書の対校作業は、今後も継続して行う予定である。

また幕府の対外政策との関係であるが、前野良沢の書簡と著訳書、周辺人物(大槻玄沢・工藤平助ら)の関連資料から、良沢のロシア研究の背景に老中松平定信の意向が存在したことが明らかになった。この件も、今後研究をさらに進めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計4件)

- ① 鳥井裕美子著『大分県先哲叢書 前野良沢』(大分県教育委員会、2013年3月)
- ② 『高校生のための東大授業ライブ ガクモンの宇宙』(東京大学教養学部編、東京大学出版会、2012年4月、全286頁。うち鳥井裕美子「第15講 異文化の翻訳—前野良沢と志筑忠雄の仕事」は256-268頁)
- ③ 『日本の対外関係 6 近世的世界の成熟』(荒野泰典他編、吉川弘文館、2010年11月、全319頁。うち鳥井裕美子「テイティング往復書簡集の世界」は263-272頁)
- ④ 鳥井裕美子監修『大分県先哲叢書 前野良沢資料集 第三巻』(大分県教育委員会、2010年3月、全380頁)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

講演・シンポジウム(計2件)

- ① 鳥井裕美子「大槻玄沢の語学力」(大槻玄沢顕彰会平成24年度大会記念講演会、岩手県一関市、文化会館、2012年6月24日)

- ② 鳥井裕美子他「私塾フォーラム」、蘭学塾である緒方洪庵・適塾の教育について報告・討論（大分県日田市・咸宜園教育研究センター主催、パトリア日田大ホール、2011年11月12日）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鳥井 裕美子 (TORII YUMIKO)
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：50180203